

仏教学研究第47号抜刷

1991

種子の本有と新熏の問題について (Ⅱ)

山 部 能 宜

種子の本有と新熏の問題について (Ⅱ)

山 部 能 宜

1. はじめに

先に筆者は、同名の前稿¹⁾において、『成唯識論』にみられる種子の本有・新熏論争²⁾の歴史的背景を、『瑜伽師地論』の中にトレースすることを試みた。それは一面、原典の存在しない『成唯識論』(以下、必要に応じて『成論』と略称)をインド仏教的文脈の中で理解するための一つの試みだったのである。

『成唯識論』が最も頻繁に引用するのが『瑜伽師地論』(以下、必要に応じて『瑜伽論』と略称)であることは既によく知られた事実であり、指名引用以外の地の文でも、『成論』には『瑜伽論』の文のパラフレーズと思われる文がまま見られることを考慮するならば、『成唯識論』をインド仏教的文脈の中で捉えようとするものにとって、『瑜伽論』との入念な比較研究が先ずなされるべき急務であろうという気持ちには、今でも些かの変化もない。

しかしながら、当面の種子の本有・新熏論争についてみると、『瑜伽論』を分析することによって見いだせるのは、あくまでも歴史的背景にとどまるのであって、この様な論争そのものが『瑜伽論』の何処かでなされているというわけではない。それでは、何か、かかる論争そのものの全貌を伝える(『成論』以外の)インド文献はないのだろうか。もしその様な文献が発見されたならば、それは、『成論』をインド仏教的文脈の中で理解するという所期の目的を達成するための、非常に有力な手がかりとなることであろう。インド瑜伽行派において、かかる三説が存在したことは、調伏天による『唯識三十頌復註』³⁾の記述により明らかなのだから。

